

## 医療ソーシャルワーカーによる退院支援業務のアウトカム評価

### —回復期リハビリテーション病院のソーシャルワーカーの自己評価—

○ ルーテル学院大学 山口 麻衣 (5165)

高山 恵理子 (上智大学・3271)、小原 眞知子 (東海大学・2601)、高瀬 幸子 (帝京平成大学大学院・6405)

キーワード3つ：医療ソーシャルワーカー・退院支援実践・アウトカム評価

#### 1. 研究目的

回復期リハビリテーション病棟(以下、回復期リハ)における医療ソーシャルワーカー(以下、MSW)は、他の専門職と協働しながら、在宅生活への復帰にむけた退院支援業務を行っている。回復期リハ領域ではMSWは比較的早くから認知され、その専門性も理解されているものの、MSWの実践やそのアウトカム(成果)についての研究は少なく、MSWの退院支援実践の病院への貢献は可視化しにくい。そこで、本研究では、回復期リハのMSWが自らの退院支援業務のアウトカムをどのように認識し、MSWによる退院支援の実践評価とアウトカム評価にどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。

#### 2. 研究の視点および方法

本研究の視点として実践参加型のプログラム評価の手法を参考とした。回復期リハビリテーション病院協会員の全医療機関(999病院)のMSWに対して郵送による質問紙調査を2014年1月に実施した。有効回答数は385人、有効回収率は38.5%であった。これまでの本研究チームでの検討やインタビュー結果を踏まえて、ソーシャルワーカーの退院支援(以下、SW退院支援)の実践評価とアウトカム評価の項目を開発した。SW退院支援実践については、1)患者・家族対象15項目、2)病院組織・院内スタッフ対象22項目、3)地域・社会対象14項目、合計51項目を5件法で把握した。支援実践の結果として得られるアウトカム項目は、1)患者/家族対象11項目、2)病院組織/院内スタッフ対象16項目、3)地域/社会対象9項目に関する合計36項目を5件法で把握した。患者・家族対象のアウトカムは1か月以内に担当し退院して在宅になった脳血管性疾患の患者のうち、自分がもっともMSWとしてよい実践をしたと思う1事例について回答を得た。本報告では、探索的な記述統計と、退院支援実践とアウトカムに関するMSW自己評価の結果を、合計得点及び患者/家族、病院組織/院内スタッフ、地域/社会別の得点を把握してその関連を分析する。

#### 3. 倫理的配慮

本調査は回復期リハビリテーション病院協会のリスト利用の承諾を得、東海大学健康科学部倫理委員会にて承認を得た上で実施した。回答をもって同意を得たとみなすこと、データ管理の徹底などの調査の趣旨を文書で説明した。

#### 4. 研究結果

回答者 385 名の年齢は 33.2 歳 (SD=6.6)、性別は 35.4%が男性、SW 経験年数は平均 8.1 年 (SD=5.1) であった。退院し在宅復帰する脳血管性疾患患者のうち MSW としてよい実践をしたと思われた 327 事例の平均年齢は 68.5 歳 (SD=14.3)、性別は 62.2%が男性、平均入院期間は 5.6 年 (SD=13.5) であった。退院時のリスク要因 (複数回答) として最も多かったのは「家族の介護力が低い」の項目で 4 割が要因としてあげていた。

SW 退院支援実践評価は、全項目合計得点が  $M=176.9$  (SD=22.1)、1) 患者/家族得点は  $M=81.6$  (SD=9.6)、2) 病院組織/院内スタッフ得点は  $M=51.1$  (SD=7.6)、3) 地域/社会得点は  $M=42.4$  (SD=8.4) であった。SW 退院支援アウトカム評価は、全項目合計得点が  $M=124.7$  (SD=14.6)、1) 患者/家族は  $M=39.6$  (SD=4.9)、2) 病院組織/院内スタッフは  $M=56.8$  (SD=7.9)、3) 地域/社会は  $M=28.2$  (SD=5.0) であった。各項目、ばらつきがあり、正規分布に近い分布がみられた。メゾ/マクロ領域の項目の方が総じてミクロ領域よりも低かった。各得点別の相関分析の結果、全ての項目が有意な正の相関があることがわかった。

#### 5. 考察

本研究は退院支援業務におけるソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究の一環として行われた研究であり、MSW の退院支援実践の評価分析モデルを探索的に開発することを意図している。SW 退院支援実践の評価については、前回の全領域の MSW を対象として開発した項目に修正を加えて (3 項目追加・1 項目削除)、回復期リハの MSW に限定して尺度の改善を試みた。未回答者も少なく、安定した結果が得られたことからモデルの妥当性を確認できたといえる。アウトカム評価は質的調査の結果を踏まえて新たに開発したものであった。極端に偏ることのない分布が得られたことから成果の把握のための指標として妥当なものであることがうかがえる。ミクロ実践の成果は具体例を示した回答であったために、アウトカムも具体的に回答しやすかった面もあるだろう。

ミクロ、メゾ、メゾ・マクロの区別した項目得点及び合計得点間にすべて有意な正の相関がみられたことは、SW 退院支援実践の自己評価が高いほど、成果が得られた認識が高いことがわかる。これまでは実践に対する自己評価の分析が中心であったが、今回の調査では実践評価とアウトカム評価との関連を示すことができた。プログラム評価の視点から MSW の退院支援実践を評価していく際に、アウトカムを意識し、より効果を明確にしながらかつて評価していく際に、本研究で開発した評価指標が活用できるだろう。今後、実践評価、アウトカム評価及びその関連要因の分析や、実際に把握できるアウトカム項目の検討、関係する他の専門職による MSW の実践に対する評価との比較などの検討が課題である。

本報告は、平成 22-25 年度科研費 (基盤 A) 「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」 (研究代表者: 白澤政和) の成果の一部である。